

「心の宝塔」

岩本 幸子

二年前の夏、父が突然脳内出血で倒れた。

幸い、父が意識を失ってから母がすぐに発見し、救急車で病院へ搬送し、手術をしたので、なんとか命を取とめることができた。

現在父は、介護施設で暮らしている。後遺症で左側の足と手は、まったく動かないが意識はしっかりしていて、物事の判断能力はほとんど正常に近いくらいまでに回復した。

父は、現在72才。7人兄弟の二男で、子供の頃、家庭は大変貧しく、小学生の時、お弁当さえ持たせてもらえなかった。お弁当の時間になると、家に帰って食べてくるからと言って、家に帰るのだが、家に帰っても、食べるものは、まったく無く、食べたふりをして学校に戻った。

小学生の頃から、農家で大根の根を耂る仕事をし、家で鶏やウサギを飼って、大きく育てて、売りに行った。とにかく、本当に貧しい生活だった。

中学校を卒業した父は、左官の仕事を見習いに、大阪の尼崎に住み込み修行に出た。冷暖房もない、物置小屋でベニヤ板一枚の部屋に住み、親方や先輩の身のまわりの世話をし、真冬には外で氷の張った水で道具を洗わされることもあった。想像を絶する究極の苦勞。わずかな賃金も自分のために使わず、ほとんどを実家の両親や妹たちに仕送りするため、朝から晩まで働いた。

また、母の実家は空襲で焼かれ、中学卒業と同時に母は、名古屋の紡績工場に働きに出た。勉強が好きで、成績も優秀だったが、貧しく昼間の高校に通うことができなかつたため、仕事をしながら、母は、夜間高校で学んだ。

そんな父と母が出会ったのは、里帰りに徳島に帰省した折、徳島駅前でたまたま雨宿りをしていた時、父が自分の傘を母に貸したことがきっかけだった。

母は傘を借りたお返しに、駅前の喫茶店で父に「あんみつ

をごちそうした。そのことがきっかけで数年間、遠距離交際することになり、結婚した。

県外で働き、大家族で暮らす実家への仕送りで、結婚当時、父はお金を全く持っていないかった。そのため、裸一貫からの出発だった。

その後数年で、父は左官業一級検定に合格し、職業指導員の資格も取得。名実共に親方として、数人の従業員さんを雇うまでになった。

風呂も無い老朽化した借家生活から一転、念願の土地を購入し家を新築。

父にとって、自分の計画通り、生活が軌道に乗った瞬間だった。

しかし、私が中学生になった頃、父は仕事中に腰の骨を骨折する大怪我をしてしまい数か月間、仕事ができなくなった。

仕事ができるようになっても、腰の痛みはずっと消えることはなかったが、父は、家族に心配かけないように、痛みをこらえてずっと働き続けた。

人生は、良い事ばかりではない。辛い事や悲しいこと、思い通りにならない事がたくさんある。その時に、いかに強い精神力で悩みに立ち向かっていくことができるかどうかで自分の人生は大きく変わる。

父は、私達家族のために、人一倍の努力をして、苦勞をして、目標に向かって頑張ってきたのである。

そんな父が突然倒れたのは、今から二年前の夏。

大学病院で、七時間にも及ぶ手術をしたが、半身不随という後遺症が残った。右脳全体に広がる大出血だったため、命を取り留めただけでも奇跡的だった。

また、とても夫婦仲の良い母は、父の病気のショックと心配から鬱症状が出てきて、難聴になった。

どんな時でも、いつも、母の頭の中から父の事が離れることはない。

毎日のように父の施設に行き、数時間、父と一緒にいる。

私は、毎日行くことを反対した。しかし、母は家に一人で居ると寂しいらしく、毎日、母の頭の中には、いつも父がいて、父を励ますことで、母は元気でいられるのだ。

母の体調を考えると、一日でも、父の事を考えず、自分の事だけ考えて、安らぎのある日を作ってほしい。

最近めっきり、母が老け込んだような気がする。

私は時々、母をショッピングに連れ出している。ショッピングを楽しむ生き生きと輝いた母の眼を見ると、介護疲れのストレス解消の大切さを実感する。

私は、父の病気がきっかけで、ホームヘルパーの資格を勉強した。介護の基礎知識や、介護者の心の理解。介護全般の知識を学び、たくさんのリハビリの本も読んだ。手術から一年半。全く感覚もなく、動かない父の左半身。マッサージをしたり、低周波治療器を試したり、温めたり、いろいろやってみたのだが、全く動かず、触っても感覚が無いようだ。関節の運動をすれば、翌日、痛みが出ると言う。

とにかく、残された父の機能をフルに使って、何か前進できないかと、車イスで移動する練習をして、健足の片足で蹴り、前に進むことができるようになった。

また、廊下の手すりを使って、車イスから立ち上がる稽古をした。重心を健足の右側にもってきて、背筋を伸ばし、手で手すりを持って、介助をすれば、何とか数秒間、立てるようになった。

しかし、ベットから車イスへの移動、車イスからトイレの便座への移動など、一人では何もできないのである。

ある日、施設の父の部屋に行くと、少し長い棒の先に挟んで掴める不思議なものがあった。私は父に、これは何かと聞くと、自分には届かない物を掴み取る時に、これで掴み取るのだと言った。

私は大変驚いた。思い通りに体が動かないだけに、どうしたら簡単に物を掴むことができるのか、父なりに考え、自分が毎日暮らす部屋でいろいろな工夫をしているのである。父にはいろんなことを考える能力が残っているのだ。

他にも、父の部屋にはいろいろな工夫作品があった。ベットの柵に、百円ショップで買った籠が取り付けられてあった。そこには、テレビのリモコンやハンカチなど入っていた。

すごい事だと思った。弱気になっているのは私の方だと反省した。

実際、体が不自由になり、辛い思いをしているのは父だ。しかし、もうすでに父は今の自分におかれた現状を受け入れ、次にどうするか、既に考えていた。

私は、さすがだと思った。苦労をたくさんしてきた父だからこそ、最後まで諦めず、頑張る力があるんだと。

私は父の事を改めて尊敬した。精神力の強さを。

先日、本を読んだ。

「川はなぜ流れ続けるのだろうか。それは涸れることなき原点の源を持っているから。そして、海という希望を見失わないからではなからうか。生命の流れも、希望ありてひとすじに流れる。どんな嵐も、川が海に向かうのを止めることはできない。ときには障害に出会っても、乗り越えるたびに川は大きくなる。大きくなるたびに水の勢いも増す。」

人生の嵐にも、希望ある限り、生命は永遠の海へ、自分の完成へ、大河のごとく悠然と流れていく。生命とは、未来を信じる力。

そして、希望を日々新たにし続けることかもしれない。」
と書いてあった。

父が意識不明で救急車で病院に運ばれた時、先生が手術をしても、意識が戻るかどうか分からないと言われ、手術をするかどうか、私は悩んだ。しかし、今つくづく反省する。

父には、父の人生がある。それなのに、私がおの大切な父の人生をもう少しで奪ってしまふところだった。

介護施設でたくさんさんの介護スタッフのみなさんに温かく見守られ、父を支え続ける母、父の所に、毎日のように見舞ってくれる父の兄や妹、友人が父を見舞ってくれる。みんな、父の事が大好きなのだ。

人生は、山あり谷ありの連続である。
生きることの素晴らしさと、命こそ宝であることを、父から学んだ。

私は、私と妹を生んでくれた父と母に心から感謝し、残された人生を楽しんでもらえるよう、これからもずっと見守っていききたい。

岩本 幸子

一九六七年

島県名西郡石井町に生まれる

一九八六年

徳島県立徳島商業高等学校卒業

二〇一三年

徳島文学賞「秋の夕暮」佳作入選
日本秘書クラブ会員